

秋田県能代市「のしろ日本語学習会」

「のしろ日本語学習会」は、秋田県能代市において1991年より中国帰国者支援を開始し、1993年からは能代市及び隣接する山本郡在住の中国帰国者、日本人男性の配偶者である海外出身女性（以下、外国人配偶者と略記する）、ALT（JETプログラム外国人青年招致事業による外国語指導助手）など日本語を第1言語（母語）としない人々に対する日本語学習支援と生活支援を行っている市民ボランティア団体です。

木曜教室は、乳幼児を抱えてなかなか学習機会に恵まれない外国人配偶者が増加したことによって教室が開催されました。日本語学習の機会の提供と平行して、保育園・幼稚園入園前の乳幼児に対して日本語・日本文化への誘いを行ったり、夫（日本人男性）に対して日本語支援活動の意義や日本語習得の大変さの理解促進を図ったりしています。

1. 日本語教室の概要

(1) 実施日 毎週2回 火曜日 19:00-21:00 木曜日 10:00-12:00

(2) 学習者（登録者数：2004年6月現在）

・火曜教室 55名

中国帰国者（高齢者、成人、小中高生）、外国人配偶者とその子ども（学齢期で来日した児童・生徒¹、乳幼児）、公的機関研究員とその家族、留学生（高校生）、ALT など

・木曜教室 23名

外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者（母親）親子

(3) 開催行事

花見、バス旅行、キャンプ（海）、お茶会、書道、盆踊り、料理講習、忘年会（クリスマス会）など。季節行事（節分、雛祭り、子どもの日、七夕など）は、火曜教室の際に行っています。

(4) ミーティング

公式なミーティング及び日本語指導のための勉強会は月2回です。2000年度からは能代市の日本語ボランティア養成講座と連動させる形式で開催しています。

インフォーマルな打合わせは状況に応じて適宜行っています。

2. 教室運営

(A) 火曜教室

公民館の1室内で、大グループ（5人以上）・小グループ（5人以下）による教室形式とマンツーマン形式の併用形式をとっています。教室形式では、指導者1名と複数のボランティアが学習者の隣に座りサポートするチーム・ティーチング（T.T）形式をとっています。

グループによって、1) 1グループ内に様々な年齢、職業、出身国、日本語学習経験を持つ人々が学習している5人以上の大グループ、2) 比較的類似した背景（出身国が異なる複数の外国人配偶者や小・中・高校生、ALTなど）を持つ人々による5人以下の小グループ、3) 自動車運転免許取得のための学習や日本語能力試験受験のための直前対策、初級学習者のためのマンツーマン形式などがあります。

1年を通じて時期を問わず新規参加者がありますが、参加前の聞き取りと対話を経て、参加グループを決定しています。なお、外国人配偶者の場合は、夫・夫の両親など家族との面接を必ず行っています。

(B) 木曜教室

働く婦人の家・託児室内にホワイトボードと座卓を設置し、教室形式とマンツーマン方式の併用方式をとっています。教室形式ではグループ内に乳幼児を連れて参加している人と単独で参加している人が同時に学習を進めています。マンツーマン形式は初級レベルが中心です。

学習環境は、カーペット床に乳児用布団2組、歩行器・乳母車（学習者が持参）、託児室に備え付けの玩具・滑り台などの遊具、児童書を用意して乳幼児に対応しています。

乳幼児を連れた学習者の存在によって、結婚したばかりの学習者やすずみに出産経験を持つ学習者が相互に日本（地域）での生活に必要な情報を交換したり、子育てや日本語学習に関して助け合ったりしています。

¹秋田県では、近年、再婚として来日する中国出身女性が増加しています。前夫との間に子どもがいるケースも多く、子どもを連れて来日する、もしくは生活が安定した頃に子どもを呼び寄せる形態がとられており、中国残留孤児・婦人の家族以外の中国出身児童生徒が急増しつつあります。

乳幼児と共に学ぶ地域日本語教室の可能性

——秋田県のしる日本語学習会の取り組みをもとにして⁽¹⁾——

東京都立大学 博士課程 藤田 美佳

<要約>

子どもを連れて日本語学習の場に参加せざるを得ない外国人配偶者の増加の一方で、乳幼児特有の行動によって、その存在は従来の学習の場を妨げるものと懸念されてきた。本稿では、乳幼児と同居で学ぶことに対する否定的な認識が広がる一方で、秋田県能代市のボランティア団体のしる日本語学習会では、日本語教室に乳幼児を積極的に受け入れる取り組みをしている。本稿では、同会における継続的フィールドワークで得られた知見に基づき、日本語学習の場における乳幼児の存在を積極的に容れこめることを試みた。ここでは特に外国人配偶者を対象とした教室に焦点を当て、彼女たちが日本語学習に参加する仕組み、夫・ボランティア・保育士・高校生などによるサポートネットワークの構築について整理した。さらに乳幼児と共に学ぶことの意義と可能性として、教室における乳幼児の存在により明らかになる教室への参加の窓口、参加者の学びの状況とその展開の可能性について検討した。そして、学習の場になることと懸念されてきた乳幼児の存在は、始めてあると同時に学習の促進剤にもなっていることを指摘し、その存在は多面的に捉えうることを明らかにした。

*キーワード：乳幼児、外国人配偶者、地域日本語教育、日本語学習支援、ボランティア

はじめに

東北農村部を中心に嫌不足などによる東アジア出身女性との国際結婚が広まり、既に20年が経過した。現在もその傾向は継続しており、法務省統計によれば「日本人の配偶者等」の外国人登録者数は28万人にも上る⁽¹⁾。

とりわけ90年代の「日本人の配偶者として来日した外国人女性」(以下、外国人配偶者と略記)の急増によって、英語・研究領域において、彼女たちが直面する生活上の問題と日本語学習との関わりや精神的ケア、保健医療などが注視されるようになり、出版や医療面で対応を想定した日本語学習支援、教材開発、カウンセリング論などが展開されるようになった⁽²⁾。

その後90年代後半からは、出版後、乳幼児を連れて参加できる日本語教室が少ないことが指摘され、公的機関やボランティア団体によってシンポジウムが開催されるなど、学習機会の拡大や保障が検討されつつある⁽³⁾。それらの報告書においては、託児を行っている教室が少ないため、乳幼児を連れての教室への参加や学習が困難であることが指摘されている。さらに乳幼児を帯同することが可能な場合でも、「子供がいない人も子供が気になり、学習が中断される⁽⁴⁾」「母親が抱っこしているそばで子供が遊んでいる同室保育は、ほほえましく感じられる場合もあるだろうが、子供の数が多くなると不都合なことが多く、学習者たちもかかりのストレスを感じている⁽⁵⁾」「日本語の学習に

集中したい学習者はたくさんいるし、日本語を勉強することを教室の基本とすれば、子供を受け入れていることはマイナスの要因にもなりま⁽⁶⁾す⁽⁷⁾といったコメントがみられ、子ども(乳幼児)は、日本語学習を妨げる存在として認識されている側面がある。

このように乳幼児を抱えての日本語学習は、1) 託児保育が整備されていないため、乳幼児を連れて参加可能な教室が少ない、2) 託児保育を行っていないが、乳幼児を連れて学習者を受け入れる場合でも、乳幼児の存在が、他の学習者や指導者の教室活動(学習・指導)を妨げる可能性があるため、乳幼児を連れて参加することを躊躇せざるを得ないという困難に直面している状況にあることが把握できる。

また2002年度より開始された文化庁・親子参加型日本語教室開設事業のように、子どもを連れて参加可能な場合でも、愛媛県13地域のうち半数以上が、親子学習をする場、子どもの保育の場とを別室としている⁽⁸⁾。

乳幼児と同居で学習することに對する否定的な認識⁽⁹⁾が広がっている一方で、積極的に子どもを受け入れている取り組みも見られる。例えば筆者が1996年からボランティアとして参加している秋田県能代市の「のしろ日本語学習会」では、中国帰国者とその子どもたちである小中学生・高校生やALT(英語指導助手)、留学生、研究者らが参加している夜間の教室においても乳幼児を連れて学習を受け入れているほか、98年より乳幼児を連れて学習者のための午前中の教室も開設されている。

在住外国人の乳幼児に関する研究としては、保育、教育社会学等の領域において、多文化保育の場や「国際児」を取り上げた研究はあるが、主に保育園・幼稚園といった制度的に確立された保育現場での研究が中心である⁽¹⁰⁾。一方社会教育における子育て、家庭教育に関する研究においては、外国人配偶者と乳幼児へ対象を拡大したものはあまり見られず、これまで

での研究対象は日本人の母親とその子育て支援に関わるものであったといえる。

本稿では、乳幼児を連れて来ざるを得ない学習者や乳幼児を連れてくることを希望する学習者が存在する状況のもと、教室内での乳幼児の存在を学習を妨げるマイナスイメージとして否定的に捉えるのではなく、乳幼児が学習の場にいることの積極的意味づけを探ってみたい。そこで、すでに5年以上もの間、乳幼児を学習の場に入れて教室運営してきたのしろ日本語学習会の、外国人配偶者を対象とした教室の活動事例に焦点を当て、その事実からのとこおこしを試みたい。

本稿は、第1章においては、90年代初期の日本語教室開設以来、親子が共に学べる場、乳幼児を抱えた母親が学べる場づくりをしてきたのしろ日本語学習会の概要を整理し、乳幼児と共に学べる場の成立背景を明らかにする。第2章では、乳幼児と共に学ぶ場(本稿教室)の現状として、学習環境整備および学習支援の展開状況を整理するとともに教室活動を具体的に紹介し、日本語学習の場における乳幼児の存在の多義性について考察する。そして第3章では日本語学習の場における乳幼児を入れることの意義と可能性について検討する。

1章 のしろ日本語学習会の概要

1) 設立の経緯と概要

のしろ日本語学習会は、1980年代後半に一時帰国した中国帰国者二世との交流を持った北川裕子氏(同会代表)が、1991年の同帰国者家族の永住帰国後、日本語学習及び生活支援を開始したことを機に設立された日本語教室である⁽¹¹⁾。北川氏は中国帰国者に対する生活支援の過程で、自立のための日本語習得の必要性を認識し、より充実した日本語学習支援のために、秋田大学言語文化課程における日本語教育関連講座の聴講や、秋田県国際交流協会、秋田市などが主催する日本語指導者養成講座の受講を重

わた。そしてそこでの専門的な知識の習得を経て、93年からは、外国人配偶者、ALTや県立大学附属研究機関の客員研究員およびその家族など地域在住の外国人等¹⁰⁾への支援の枠を拡げてきた。

教室は、毎週2回火曜日19:00～21:00と木曜日10:00～12:00に公共施設を借りて開催されている。運営費用は、現在は火曜日が能代市まちづくり課から、木曜日が秋田県国際交流課からの支援を受けており、これに加え参加者(学習者・支援者)からの月額500円の参加費(ただし、乳幼児・児童生徒は無料)によって賄われている。

火曜教室の学習者の構成は、中国語国語者(成人、小中高生)、外国人配偶者、県立大学研究員、研究員家族、留学生(高校生)、ALT(英語指導助手)など40名ほどで、木曜教室は、外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者(母親)親子15名ほどが参加している。

学習者の国籍は、中国、フィリピン、韓国、三國が多くを占めるほか、アメリカ、イタリヤ、インド、イギリス、インドネシア、オーストラリア、カナダ、タイ、デンマーク、マレーシア、ミャンマーなど多様な地域からの出身者が構成されている。

一方ボランティア支援者は、主婦、会社員、専門職、退職者、高校生、教員経験者、現職教員、教員志望者など多様な社会的背景を持つ10代～70代の男女と、送迎・子守り・見守りのため参加している学習者の配偶者(日本人男性)からなっている。

学習形態は、火曜教室が公民館1室内で教室形式、グループ学習形式、マンツーマン形式による複数形式の同時進行で、木曜教室は「働く婦人の家」の託児室における教室形式である。使用教材は火曜教室、木曜教室ともに指導者が作成した教材や日本語能力試験対策教材、復習のための宿題プリントである。日本語能力試験を受験しない学習者に対しても月に一度、日

本語能力試験対策用の聞き取りテスト(テープ)や、北川氏が作成した聞き取りテスト(虫食い問題)、テープ聞き取りによるディクテーションを行い、音読聞き慣れているボランティアの所以の日本人の声を聞き取る訓練も行っている。

学習者は北川氏の板書をノートに書き写し、練習問題は配付されたプリントに記入し、当てられた練習問題(全員に振り当てられる)は、全員がホワイトボードに答えを記述する形式を取っている。問題は出された翌週提出し、チェックされたものが翌週各人に戻される。そしてその日の授業のはじめに不明な点の質問を受けるサイクルである。このように板書を写す、問題を解く、プリントで復習するといった一連の流れで学習が展開されている。

一方、毎週の教室活動以外にも定期的に行事を開催しており、花見、バス旅行、キャンプ(海)、お茶会、書道講習、装飾り、料理講習、忘年会(クリスマス会)や季節行事(節分、雛祭り、子どもの日、七夕など)を通じて、家族を含めた教室参加者同士の交流を深めると共に、絵画、折り紙、地域住民への参加機会も開きながら、教室の存在意義や学習者の存在を広く知らしめる機会にしている。

またボランティア間の情報共有の場として、旧来より公式なミーティングや日本語指導のための学習会を月1回開催してきたが、2000年度からは、能代市まちづくり課主催「日本語学習ふれあい支援事業」の日本語指導ボランティア養成講座と連携させる形で場を設けている。

2) 外国人配偶者を対象とした「木曜教室」開設の背景

木曜教室は外国人配偶者を主な対象として1998年に開設された。当初は中国から帰国したばかりの呼び寄せ家族¹¹⁾の男性が、自動車運転免許取得のためや、就職が決定するまでの間参加していたこともあったが、99年以降は

外国人配偶者のみとなった。その後2000年4月からは働く婦人の家・託児室を使用して授業を行っている。

現在はカーペット敷きの部屋に、絵本・玩具・玩具、乳幼児用の布団が整備された環境で学習をすすめているが、開設当初は火曜教室と同様に公民館のタイムズの教室で長机とハイチェアで授業を行っており、乳児は学習者である母親が持ち参った布団を机の上に広げたり、母親の隣の椅子に布団を置いて座ったりといった形態であった。その頃は、教室内でボランティアと遊ぶ幼児もいたが、玩具・玩具は特になく、また人数が少なかったため幼児同士で遊ぶことは難しく、持参した玩具で遊ぶ程度であった。このほか、母親が勉強している協で乳児が絵本を欲して筆記用具で遊ぶことや、幼児が同様に筆記用具を欲し、母親をまねてノートに絵や文字(しきもの)を書いたり、五十音が並んだ玩具を使って母親のサポートでひらがなを学習したりする子どもも存在した。

まず乳幼児を連れて参加可能な教室がどのような背景をもって成立してきたのかを整理しておく。研究の背景として述べたように、乳幼児を連れて外国人配偶者が日本語学習を進める場が十分に整備されていない状況にある。しかし、のしる日本語学習会の場合は、子どもが生まれても学習を継続したいという外国人配偶者の学習欲求のもと、乳幼児を連れて日本語学習の場に参加することが、ボランティア側からも学習者側からも大きく問題視されることがなかった。なぜ問題視されなかったのか、ここではその具体的な要因と思われる点を木曜教室成立の背景と関連させつつ明らかにしていく。

1点目として、のしる日本語学習会が中国語国語者の生活支援から日本語学習支援へと活動を展開していったことから容易に継続できるように、親も子どもも含めて家族で学習の場に来ること、親子を含めた家族単位での支援が当然視されていたことが挙げられる。ただしその当

時は、小中学生が親と共に参加していることはあったが、韓国三世である幼児は日本人幼児と同様に保育所に入所していたこと、入所当初は言語の問題などによる影響が多少発生したが、継続的な関与とならなかったこともあり、支援者側にとっても、その時点では文化的背景が異なる場合に発生する様々な問題や障壁が十分に想定できず、幼児への対応や支援は特に行っていなかった。

その一方で学齢期の子どもとその親の場合には、マンツーマン形式や教室形式などでそれぞれ日本語学習を進めるケースや、親は自動車運転免許の取得のための学習や生活場面を中心とした日本語学習を進め、一方子どもは教科書学習や高校受験のための試験対策、日本語学習を進めるケースなどその形態は多様であった。

2点目として、学習者、ボランティアともに10代～70代までの多世代が教室に参加しており、皆に行事の際には、孫を連れて参加するボランティアや4世代で参加する中国語国語者などもおり、多様な年齢構成の人々が参加することは日常的であったことが理由としてあげられる。

3点目として97年度より乳幼児を連れて学習者が参加し始めたことがあげられる。

1件目のケースは、教室参加当初(96年)より夫(日本人)が送迎や見守り(学習者の横に座っている)のため同行していた学習者Aさんが出産後(97年)、夫が学習者の隣席や教室の外などで子守りを引き受けて学習を進めたというケースである。

2件目は、県立大学附属研究所・客員研究員の配偶者(女性)である中国人のBさんが、日中は幼稚園に通園中の子どもCちゃんを伴って参加し始めたことがあげられる。父親は研究のため多忙で帰宅が遅くなることも多く、また近隣に親戚や知人がいないBさんはCちゃんを帯同せざるを得なかった。夜の教室への参加であったため、参加に当たっては比較的

Bさん宅に近い北川氏や他のボランティアがその親を迎え、安全を確保した。

この時北川氏やボランティアの間では、子どもを連れてくることを問題視する発言はほとんど出されなかった。というのも、この頃教室には中国籍園児や中国出身の外国人配偶者で子育て中の学習者が数名参加していた。そのため、ボランティアの間では、周囲に知らないBさんが、教室に参加することによって、この場を介して比較的類似した背景を持つ人々と中国語で話し、育児や日本の生活に関する悩み・疑問・喜びなどを分かちあひ、見知らぬ土地で暮らすことによるストレスから開放される可能性をもつのではないかと考えられていたからである。

教室内では3歳児Cちゃんは母親の隣のバブイ椅子に座った。タイミ床に布団を置いて座っていた。ときおり中国籍園児（高学年男子）やボランティアが遊び相手をすることもあったが、母親の学友が遊びながら、自分も母親と同様に筆記用具や問題のプリントなどを渡し、Bさんがひらがなを点検で書いたものを渡してなぞらせたり、日本語指導者である北川氏が、ひらがな練習帳や簡単な問題を与えたりすることによって、教室内でむずむずかしく感じたりすることはあまりなかった（時には落ち着きのないこともあった）。

一方で、教室内では複数のグループが同時に学習をすすめており、黙然と授業が進められる学校とは異なり、「このうさぎい中で、よく真中して勉強できるものだ」などと複数のボランティアや来訪者・見学者からのコメントが漏れられるほどに賑わい、中でも学習が進められておられ、幼児一人が多少騒いでもその騒音のみが突出して響いてしまうというところはなかった。この騒々しさについて学習者からは、「うるさい」と感じたりはあきまりありません。[学習者の人々]の声はそれぞれ口々に話しているのでも、私たちはそれぞれ口々に話をしているのでも、

人に見えるように見えますが[学習内容は]ちゃんと覚えているんです」(Cさんは筆者)とのコメントがあり、一室内で複数の形式での学習を進めざるを得ないことによる賑わいを感じていたボランティアを安心させたこともあった。

これまでの3点は物理的要因や自然発生的な要因として捉えられるが、4点目としてあげられるのは、これら3点の背景によって乳幼児を思いがけなく(やむを得ず)受け入れることになった結果、その後教室の中で発生した新たな学びの機会を北川氏やボランティアが積極的に受け止めたことがあげられる。

具体的には、乳幼児といっても、親が真剣に学んでいる場では、周囲の心配をよそに泣き叫ぶ様子がなく、それどころか、親のまねをして紙やホワイトボードに何かを書きたがるというような積極的な学習状況が発生していたことがあげられる。こうした乳幼児の様子について北川氏は、理論的にはわからないが、親が学んでいることの影響が何かあるのではないかと考えたという。またあるボランティアは、Bさんが、ひらがな練習帳などの基礎的な内容ではあるが、Cちゃんに教えていることがBさんの学習へ間接的な効果を及ぼしているのではないかと考えたという。

これらの背景に加え、県内他地域の教室と比べ、比較的外国人配偶者の数が少なかつた熊本市周辺地域においても外国人配偶者である学習者が増加してきたことが大きな後押しとなり、北川氏は外国人配偶者を対象とした午前中の教室の開設を決断した。

2章 日本語学習の場における乳幼児の多義性——「木曜教室」の現状

日本語学習の場における乳幼児の存在は、学習を始める存在としてだけではなく、学習を促進させる存在にもなっているのではない。ここでは、乳幼児が学習の場にいることによって、どのような支援・工夫がなされているのかを、学習環境の整備、人的サポートの側面から整理し、さらに乳幼児の教室内での様子を紹介しつつ、教室の現状を具体的にみていく。

1) 日本語能力試験の受験と合格

地域の日本語教室では、比較的類似した文化的・社会的背景を有する外国人同士との交流の場や、地域住民と外国人との交流の場として機能することを主眼に置き、日本語習得のための学習支援を重視していない教室も見受けられる。一方のしろ日本語学習会の場合は、地域で自立して生きていくために必要な日本語の習得を支援することが設立の目的の一つであったため、周囲からの承認を得るための一つの目安ともなる日本語能力試験の受験・合格のためのサポートを行っている。

託児室で教室が開催されるようになった2000年に、乳幼児を連れて参加している外国人配偶者や、同様に乳幼児を抱える中国籍園児二世が初めて日本語能力試験(2級、3級)を受験し合格した。この時の合格者は火曜教室へ乳幼児を連れて参加していた学習者達で、前述の「…道内ではいるように見えますが、…」とコメントした方も含まれている。そして翌2001年には、2000年より幼児を連れて参加している学習者が3級を、火曜教室を含めこれまで4年間教室に参加し、前年3級に合格した学習者が2級を受験し、それぞれ合格した。この2級合格者Aさんは週1～2回の学習を継続し、2002年には1級を受験し合格した。

彼女たちの年間学習量は週に1～2回各2

時間の教室参加と毎週配布される復習を中心とした宿題プリント、8月の受験申し込み以降に受験者のみに配布される試験対策のための宿題のみである。例えば1級に合格したAさんの場合は、育児・家事・仕事という多忙な毎日を送っているため、日本語教室への参加と宿題を中心とした学習、受験の直前月には教室内で試験対策のテキストに取り組み、北川氏やボランティアに不明な点を解説してもらった形式で学習を進め、試験に臨んだ。他の受験者は教室での学習と宿題のみで試験に合格している状況であり、乳幼児を連れて参加している日本語学習に集中できているものと思われる。

地方小都市特有の偏見として、日本語能力試験の受験のために上京しなければならないという制約がある。そのためすべての学習者が気軽に受験できる状況ではない。しかし試験に合格するまでの期間や、記入等のサポートを行っているため、毎年受験希望者がおり、とりわけ近年は木曜教室に参加する外国人配偶者が受験を希望する傾向にある。

特に外国人配偶者の場合は、教室での学習成果や彼女が何のために学んでいるかを家族に理解してもらえない限り、費用面や子どもを預けること、家を空けることなど受験に当たってのサポートが得られないことがあげられる。戦後の民法改正では、日本国憲法の男女平等規定のもとで家族制度⁽¹⁰⁾が廃止されたが、のしろ日本語学習会の活動基盤である地方小都市や農村部では、現在においても「男は外・女は内(家)」という性差に基づく権力・役割配分が依然として反映している状況がある。そのため家父長制⁽¹¹⁾の影響による家庭内での権威関係が強く機能している側面があり、受験を許可してもらえないことそのものが、家族が外国人配偶者の学習成果を肯定的に受け止めてくれるとも考えられる。

木曜教室ですべてに次年度(2003年度)の受験希望者も出てきており、外国人配偶者の日

本書能力試験受験に對するモチベーションは高
いものと思われる。その背景の一つとして、例
えば1歳に合格したAさんが、能代市との共
催である火曜教室において2003年4月から北
川川のアシスタントとして公的に承認され、講
師料が支払われる可能性があることや、Aさん
の娘（5歳）が、北川氏に対して「せんせい
と手紙にほんごをばてくてくれてありがとう」
と手紙を渡し、娘が毎朝の学習を積極的に受け
止めていると思われる光景を目の当たりにした
他の学習者たちが刺激を受けたことも、外国人配
置の受験意欲につながったものと思われる。

2) 日本語学習に集中できる仕組み

ここでは教室の同僚場所と人的サポートの2つの側面から教室内で日本語学習に集中できる条件をみていく。

1. 託児室という学習環境

乳幼児を受け入れるに当たって、託児室を学
習の場として活用していることがあげられる。
8年に外国人配偶者を対象とした木曜教室を
開始して以来、学習環境整備のために託児室を
借りることを要望してきたが、様々な制約や障
害があり、託児室を確保するまでに2年を要
した。この間公民館の会議室を借りて活動し
ていたが、会議室はタイل貼りの床のため、乳幼
児が這ったり寝ころんだりするには適当な環境
ではなく、転んで怪我をしたり、机や椅子に頭
や身体をぶつけたたりする危険性はいくつかある
。また学習者が持参する玩具がいくつかある
程度で、子どもによってはずすぐに飽きてしま
い、教室内をウロウロと徘徊したり、母親の周り
まわったりして離れないといったことも
あった。

現在、木曜教室を開催している託児室内には、滑り台・木馬などの遊具をはじめ、オルガン、玩具、絵本が用意されているため、それらを使って幼児が一人遊びをすることも幼児同士で遊んだり、ボランティヤと遊んだりすることも可能だ。

である。また記誌安全体の味がカーペット貼り
のため、教室中を這うことも可能であるし、転
んだときの衝撃も少ない。さらに乳児が主に
遊ぶエリアには3m四方の滑す布面張の敷物
を敷いてあるため、衝撃はさらに少なくなっ
ており、寝がえることも可能である。また乳児
のために敷物の上に常に布団が用意されてい
る。そして布団の脇には保育ボランティアが少なく
とも常時1名座っている状態にある。
学習机は折り畳み型車座を借りて記誌室に持
ち込み、並目であるクッション製のサイコロを
椅子にし、床ワイヤボードを前座の中心におい
て学習を進めている。

2. 妻・ボランティア・保育士によるサポート

学習者の配偶者（日本人男性）が参加している場合には、自分の子どもである乳児を抱きかかえてあやしたり、乳児を抱いたまま妻の後ろで学習を見守ったり（ただしほとんどの場合、妻はこの見守りに気づかず、日本語学習に集中している）、歩行器や乳母車を持参し、これらを教室内に持ち込んで子守りをしたりミルクを飲ませたりしている。外国人配偶者が乳児を抱えていない場合などでは能代市外から参加している場合、学習者の配偶者が送迎や子守りのために教室に参加しているが、教室の開催時間が日中のため夫の参加が不可能な場合も多いため、その場合はボランティアが学習者を送り迎えしたり、子守りをしたりして、学習に専念できるように配慮している。

木曜教室の開校当初は平日午前という開催時期の関係で、ボランティアの数が現在の半程度以下であった。外国人配習者の学びの場としての役割も認識されていた時点では、日本語ボランティアがやがて外国人支援に携わることが希望するボランティアのみが参加していたともいえる。しかしながら、託児室で教養を開展するようになってからは、日本語は教えられないが、育児経験者や子育て経験ボランティアとして、ならしめられる

ことがあるのではないが、子どもと遊ぶぐらい
でもいいのなら手伝ってみたいという教養への
新規参加者が得られ、教室への参加の枠が広
がったといえよう。そしてその結果、多くの乳
幼児の受け入れが可能になったことがあげられ
る。

教室内には、日本語指導を行う北川氏のほか、
元小学校教諭の60代女性がアシスタントを務
め、火曜教室にも参加している日本語ポラ
ンティアの40代・50代女性、小学校におい
て外国人児童担当の非常勤調教師を持つ20代女
性（教員免許保持者）、英語教室の講師を務め
る20代女性、保育ポランティアの40代女性
など複数のポランティアが、教室内での子ども
の動きに目を配っている。

また火曜教室に参加している保育士の女性も、さんが月に1〜3度火曜教室に参加し、専門的なアドバイスもおこなっている。彼女はもともと保育士の専門性を生かすことを目的に教室に参加した訳ではない。能代市内の高校に通学していた頃に教室の存在を知り、参加を希望していたが、家が市外で夜間の教室に参加することができなかったという。その後2000年に能代市内の私立保育園へ就職したこと機に火曜教室へ参加した。

本語教室への参加についてたずねたところ、勤務先の社長は地域の国際化に理解を示しており、今後仕事上で日本語教室で学んだことを生かす可能性も出てくると思うんですが、日本人が相手の今の仕事でもすでに生かせることって沢山あるんです」と語り、現在には「保育園で日本語を日本語教室に生かすというよりも、日本語の経験を日本語教室に保育園でどう生かすかという状態」だという。さらに、「自分が何かをし貢献しているというよりも、学ばせてもらった気持ちでいる」ことを添えた。

そして驚いたこととして、「日本語教室で子どもが親に何か質問すると、親は大人を相手に話してみたいに答えていること」を挙げた。今後

(8) 教室内での乳幼児の様子

これまで述べてきたように学習に集中できる条件を整えても、乳幼児が泣いたり、寝にまともなわりついたりして落ち着きがなかったりすると、学習がどのような乳幼児特有の行動によって、学習が妨げられてしまうのではないか。しかし、この教育室内では何が日本語学習に集中しているときに乳幼児はほとんど泣かないのである。不審に思われるかもしれないけれども、転んだり、どこかにぶつかったりもしないことが観察を通じて把握できた。もちろん教室に初めて参加した乳児(3～4ヶ月)が泣き続けたことはあるが、長い場合でも2ヶ月ほど教室に参加するうちに泣き止むのがやむを得ない状況にある。なぜ泣いたり、まわりついたりしないのだろうか。

その理由の一つとして、教室内には玩具や遊具がふんだんに用意されており、一人遊びも可能であること、さらに日本語指導者およびその補助員以外にも複数のボランティアが教室内にいるため、常に乳幼児の様子を見て、一緒に遊んだり、絵本を読んだり、抱きかかえて外を見せたり、トイレに連れて行ったり、服替えに手を助けることも可能であり、乳幼児のペースに合わせた対応をすることがあげられる。

ここで本所では乳幼児の教室内での子に焦点を当て、具体的にいくつかのエピソードを紹介しよう。教室活動の様子を明らかにしている。

【エピソード1：読み聞かせ】

ある日母親が問題を解いている間、2歳児のDちゃんが、「これ読んで」と北川氏に絵本を差し出した。

その様子を見ていたと思われるよちよち歩き
の1歳児Eちゃん。Fちゃんが北川氏とDちゃん
ののところへ歩み寄ってきて、Dちゃんをまね
るよううにして北川氏に向けてポーンと本を放り
出すという場面があった。

北川氏は彼女たち3名に対し、「あれ？どうしたの？給おうねー」と声を掛けて一緒に本を給うように促し、そしてその後差し出された本で読み聞かせを行った。

この光景を目にしたDちゃんの母親Gさんへへのその後の聞き取りによれば、Dちゃんは絵本に興味を持ち、文字が読めるわけではないが、本を飲めるようになったという。そのたまたま教習室開始もしくは終了後に、図鑑施設である図書館へ立ち寄るのが週に一度の決まり事となったという。Gさんは事柄に対し「Dちゃんになったのよ」ともせず、でも本が好きみたい」とも照れ笑いを浮かべた。そして、Dちゃんを連れて絵本を飲させたことが、図書館へ足を運ぶきっかけになったと語った。

その数ヶ月後、Gさんをはじめとした数名の学習者から、ひらがなを覚えても、字にもうまうま書く本を読んであげることができないがどうしたらよいのかとの悩みが寄せられた。そこで北川氏では、北川氏が海外クラブ（編輯）の講師を務め、また留学生や中国留国生がかつて在籍した、これまで数名の生徒がボランティアとして教室に参加してきたX高校の生徒へこの悩みを打ち明けた。最終的に海外の生徒への個人的な依頼ではなく、同校へ依頼する形となり、放課部員をはじめとする3年生15名の協力を得て、読み聞かせ用の朗読テープが完成した。

依頼に当たっては、学習者 10 名が北川氏を

【エピソード2：泣かない幼児】

1歳児Eちゃんはよちよち状態ではあるが、一人で教室内を歩き回ることが可能である。北川氏がホワイトボードの初で学習者に説明をしている時には、母智の元まで行き、指さかかえられながら母智と一緒におとなしく説明を聞いていた。

北川氏の説明が終わると、母の元を離れ、滑り台の周りをウロウロしはじめた。

その様子を見ていたボランディアはEちゃんを支えながら階段を上らせ、滑り台で遊ばせた。

ミちゃんは滑り台遊びが一番のお気に入り
 しく、毎週のようにポランディアに滑り台遊び
 をさせてもらっていた。いつものように何度も
 繰り返して滑るうちに飽きてきたのが、滑り台を
 壊れようとする仕事を見せたため、ポランティ
 アはミちゃんと共にいったん、滑り台を壊れた。
 そしてミちゃんは他の幼児の顔でおもちゃ
 箱をあざはしめた。

ところがその直後、ゴンという音がした。音

の出所はEちゃんが滑り台の階段部分に突っ込んでいったためであった。

あわてたボランティアはEちゃんを抱きか
かえ、湾り台の横のスペースへ回座に移動し、
Eちゃんを膝に抱くように舉げて、彼女と向き
合う形で手をつなぎ、Eちゃんが「幾度か普通
に会話できる相手ではないことを認識しつつ
も、危ないことをしたこと、大丈夫なものと
しないだの手を上下させながら話しかけた。この
ときのEちゃんはかなりの痛みであったと思わ
れるが、全く泣き叫ばなかった。

実はボランティアが抱きかかえて移動し、向
き合って話をする前に「赤ちゃんは母親の方を
見ているなり。しかし、この時母親は真剣に問
題に取り組んでいる最中であった。

ポランティアは、母親の方を向いたエちゃんを、母親の方へ向かわせようとしたが、泣きませずポランティアの方に向き直り、ポランティアのおっぱいにようとするとエちゃんの相手をし続けた。

この時のEちゃんとポランディアのすぐ横では別のポランディアとDちゃんが積み木をしていた。教室終了後の聞き取りでは、このポランディアは、解が室内であるにもかかわらず間違えて起きている一件には全く気づいていなかったという。

その後、休憩時間になるやいなやミちゃん
は母親の元へ向かい、この時はじめて迎いた。
すぐにボランティアが母親に状況を説明し、身
体的に問題のないことも確認した。

Eちゃんは母親に抱いてももらって一瞬泣いた。遂にすぐに泣きやみ、母親の腹でおやつを食べ、飲み物を飲む始めた。食べ終わると何事もなかったかのように他の子どもたちと同じく帰るべく、遊び始めた。

その後ミちゃんは母親と隣席のHさんの間にある乳母車でHさんの息子が足をじばたきさせているのを見つけた。そしてトコトコと近寄り、その直前にHさんがしていたように乳

【エピソード3：泣く乳児】

中国帰国二世の配偶者である「さんは生後4ヶ月の「ちゃん」を連れて出発後初めて教室に参じた。生まれて初めての教室参加であったこと、自宅とは異なり、教室内が暖房でなかり寒い状態であったためか「ちゃん」は教室に入るなり、泣き続けた。

日本国学習が始まる頃にはいったん泣きやん

だため、母親と離れた位置にある乳児の希望に響かせ、保育ボランティアが相手を手をしようとしたところ、再び泣き始めたのである。そこで母親の顔に布面を置いて寝かせたところ平静を取り戻し、Jちゃんは静寂、母親の方へ手を伸ばすような仕草を見せた。

そこへ地域の子育て支援事業に属しているKさんが見学に来て、Jちゃんを見つめるなり抱き上げると、Jちゃんは再び泣き出した。

1さんによれば、自宅では中学生の姉がいつもJちゃんを抱いているという。これに対して子育て経験のあるボランティアは抱き癖がついているのではないかと口々に言い始めた。

Kさんは保育の専門家であるため、母親である1さんがJちゃんを見て、他のボランティアがJちゃんに近寄ろうとしても、泣きやまないJちゃんを抱いたまま教室内を移動しながらあやした。そしてKさんがJちゃんにミルクをやろうとしたところ、Jちゃんはそれにまもって一段と大声で泣き出した。

そこで母親1さんがJちゃんを抱こうと手を差し出したが、Kさんは母親を制止し、Jちゃんを毛布にくるんで教室の外へ出てしまった。

教室には静寂が訪れた。火曜教室とは異なり、比較的静かな中で学習している木曜教室だが、この日は常にJちゃんの泣き声が響く中で、突然訪れた静けさは教室内に緊張と不安をよんだ。母親1さんをはじめボランティアも落ち着かない様子となり、どこへいったのかとぞわぞわしはじめた。これまでも他の学習者が、生後3ヶ月の乳児を連れて来た際に乳児が泣いたことがあったが、泣いている乳児が教室外へ連れ出された経験をもたない学習者やボランティア達は、落ち着かない様子になったことが明らかであった。

そこで、あるボランティアが教室の外へ出てJちゃんとKさんを匿そうとしたところ、階

上の廊下から大きな泣き声が聞こえた。ちょうど階段を上ろうとしていた親子も驚くほどの大きな泣き声が響き、通りかかった親子は一体何があったのかとのかのの様子で周囲を見回していた。

保育の専門家であるKさんに対して、教室に居るよう声を掛けにいくと思ったボランティアは、教室へ戻って他のボランティアに声を掛け、Jちゃんが泣き叫んでいることを伝えたところ、そのボランティアは「ここで泣かせておけばいいのにね。でも専門家でしょ。だからここで泣かせておいてくれとは言いにくいよね」と言った。

その直後Kさんは泣き叫び続けるJちゃんを連れて教室に戻り、母親1さんの隣の布面にJちゃんを寝かせた。再び泣き声が大きくなり、Kさんが離れた際に母親1さんは布面の上のJちゃんに顔を近づけ話しかけた。すると泣きやみ、1さんは再び日本話室に戻った。

1さんが指導者の側を向くやいなやKさんが再びJちゃんをさすったところ、また激しく泣き出し、Kさんがあやし、さすり、口で音を鳴らしたが、泣きやまず、母親の1さんが抱くなり大人しくなった。そして1さんはJちゃんの背中をトントンしながら指導者の質問に答えた。

その後Jちゃんは母の膝の上でおとなしくしており、指導者の問うる度に母と同様に目をやった。その後、隣に座っている学習者が「やさしいです」という質問に答える際にJちゃんに微笑みかけた。その後Jちゃんは母と他の学習者の間で教室終了時までおとなしくしていた。

教室終了後、1さんはJちゃんを連れてきてよかったのが、連れて来ない方がよかったのではともし、頭を下げて帰った。

その後すぐに1さんが北川氏に対して、「先生、Jちゃんを連れてくるのをやめようか

と思う。先生、みんなに迷惑がかかるから」と相談があった。北川氏は「来ないなんて言うのはやめなさい。いいんだから安心しなさい」と返答したところ、1さんは「いいんですか?」と聞き返し、北川氏は「私がいいって言うんだから安心しなさい。大丈夫、泣かなくなるから」というやりとりをしたという。

その後Jちゃんは、初めての参加からほぼ2ヶ月が経過した時点で泣かなくなった。

Jちゃんが泣かなくなったその日、参加者はみな「泣かなくなったね」と口々に言い、泣かなくなったことに対する喜びとともに、これまで教室に参加した子どもたちと同様に2ヶ月程度で泣かなくなったことを確認したという。北川氏はこの時のことを振り返り、「Jちゃんが参加した」翌週の教室から、Jちゃんを教室の外へ出さないで、この子をどうやって泣かさないようにするか、みんなが同じ思いをだいてJちゃんと接した感じだった」と語った。Jちゃんが教室に参加してから、参加者たちは、Jちゃんを泣かせないことよりも、Jちゃんが泣くことによって、母親である1さんが申し訳なさそうにする様子や、遠慮して教室に来なくなることの方が気がかりだったという。

3章 乳幼児と共に学ぶことの意義と可能性

2章で紹介した3つのエピソードは、極めて複雑な要素を持ち合わせているように思われる。そこで、ここでは、日本語学習の場に乳幼児が存在することによってひらかれた教室への参加の糸口と、教室への参加を通じて派生した、地域社会や職場などとの関係性の多面化・多層化について、正統的周辺参加論の観点から考察していく。

1) 乳幼児を介してひらかれる参加と学習の可能性
Lave and Wenger (1993) による正統的周

辺参加論 (Legitimate Peripheral Participation Theory) では、学習は、個人による知識や技能の習得としてではなく、実践共同体への参加を通じてアイデンティティの変容として捉えられており、徒弟・住立屋・修道士・陶工職人・新卒中のアルコール依存症者の徒弟制を題材に、「新参者が実践共同体 (community of practice) の一部に加わっていくプロセス」が描かれている。

のしる日本語学習者の場合、教室内での人的サポートとしてあげた学習者の夫やボランティア (=新参者) は、主導という役割を持つことによって、教室という学習空間 (共同体) に正統的に周辺的なやり方で参加しながら、結果的に日本語教授法や異文化理解などのさまざまな学びを得ているといえるのではない。

さらに学習者の夫たちは教室への参加を通じて得た気づきや学びによって、地域や家族との新たな関係性を見いだしているものと思われる。例えば教室への公的支援が打ちきりられる。例えば教室への公的支援の継続を、行政や地域に存続のための支援の継続を、行政や地域に付けてはたらかせようとしはじめたことや、外国人配偶者として始まった自分の母国を日本語教室の行事へ誘い出し、姉妹上の関係づくりを働き出したりしていることが挙げられる。

また、Lave and Wenger は「正統的に周辺的なやり方で参加できるといことは、新参者が円滑な実践の場面に広くアクセスできるとを意味している」¹⁰⁾と述べている。これは、読み聞かせテープを作成した高校生のように、実際の教室には参加していない場合でも外国人支援や日本語学習支援に関わりうる可能性がひらかれていることと問わりを持つものと思われる。

具体的に教室以外の場からボランティアに参加することになった高校生について考えてみると、特に国際交流や在日外国人支援に参加したいと考えている高校生以外には、きつかなしに

外国人配偶者の支援に携わることがはかばかにくい。また平日午前中に開催されている教室への参加は物理的にも不可能である。しかし、読み聞かせ用のテープ作成に協力したことによって、「外国人配偶者一高校生」という積極的な外国人配偶者一乳幼児一高校生」という新たな関係性を持ち始めた。高校生にとって外国人配偶者の置かれた状況や背景を自分のこととしてとらえることは難しいが、乳幼児については、幼少時の経験と関連させながら自らと関わりを持つこととして引き受けることが可能だったのではない。

引き続きX高校の生徒達がテーマ作成を希望していることや、夜間に開催されている火曜教室および行事への参加に興味を持ち始めた生徒達によって、試み開かせ用のテーマ作成から発展した問題はさらに多様化していくものと想われる。

一方、保育上の場合は、勤務先の保育園での子どもや親との関わりだけでは足りなかった点を、疑問としてとどめていた側面を、木曜教室での親子の関係性のあり方を通して相対化し、保育園での活動に役立てている。と同時に、保育士としての専門性を日本語教室に還元し、教室内部での新たな役割を見だしつつある。このように保育者としての専門性の捉え直しを行うに、勤務先やボランティアの場で、専門性を活かし、それぞれの領域で関わり合いを深めていくことは、多面的に専門的な力量を形成していくことにつながり、個人または専門家としてのアイデンティティ形成と密接に関わるものと思われる。また、保育ボランティアが外国支援や日本語指導に興味を持ち始めた点からも正統的な学習・アイデンティティの定着が把握できている。

学習支援者・学習者双方にとって学習の効率
を低下させるかと思われてきた乳幼児が介在項

なる。小さな社会作ってやっている」と乳幼児の社会での世話意識の芽生えを指摘している。

エピソード³では、見学者Kさんの振る舞いから、母と娘の間に「教室」が形成されていることが読み取れる。この「教室」は、母親と子どもとの関係性によって形成され、その中で子どもは「学習者」として振る舞っている。この「教室」の中で、子どもは「学習者」として振る舞っている。この「教室」の中で、子どもは「学習者」として振る舞っている。

北川氏は、教室への参加について、「外国人に何かしてあげた、可哀想な人を手伝った」という意識を持つのではなく、「自分の仕事や気持ちに役立ててこそ、ボランティアだと思う」と強調し、「教室との関わりの中で、地域が直面する問題に気づく人が増えていくと、外国人も日本人もくらしやすくなる」と認め、新たな参加者や見学者の来訪を積極的に受け止めているという。

例えば近年注目されているケア論では、ギガン（1982）が、他人が必要としていることを感じ、世話をする責任を引き受けることによって、他人の声に注意を向け、自分の判断に他人の視点を含み込む「世話の倫理」を描いている⁹⁰。またメイヤロフ（2002）はケアの一要素としての責任に注目し、「他者の成長への要求に対して応答できる責任」を「他者からの呼びかけに対し、自分がこたえ得るということである」と述べている⁹¹。

配役者(妻)の「呼びかけ」に気づき、教室へ参加した夫や、エピソードにあるように、外国人配役者からの呼びかけに反応し、高校生との関わりを持つメディアエータ(媒介者)の役、原田を兼ねた北川氏による一連の行動は、これらのケア論と関わりを持つものと思われる。

乳幼児の存在を介して展開される教室内での

CIEE Review of International Education, Nov 1, 2003

ケア（ケアリング）は、ケアすべき働き存在と認識される乳幼児によって、多層化されているのではないだろうか。また教堂への参加者（学習者・支援者）が、日本語教堂を介した地域とつながりを通じて、教堂で得た気づきを地域づくりに還元させていくような「世話の倫理」は、地域における「新しい公共性」を生む可能性があるのではないだろうか。

むすびにかえて

本稿では乳幼児を学習の場に入れた日本語教室でのフィードバックをもとに、これまでで学習の妨げになっていると思われてきた乳幼児の存在は、多面的に捉えることを明らかにしてきた。その存在は学習の妨げであると同時に、学習の促進にもなっていると思われる。さらに乳幼児を介在とすることによって、新たな外部ネットワークが構築されてきたことも見いだせる。事例として取り上げられた日本語学習会の取り組みは、ある特徴的なケースかもしれないが、事実として、乳幼児が存在することによって、よりよい学習空間が成立している場合もあることが捉えられたのではないが。

最後に今後の研究課題として2点挙げてお
く。エピソード3でとりあげたように、ある
とき乳児が外に出されるということがあった。
このとき学習者も学習支援者とも不安で集中で
きなかった。母親たちは、乳児が目の届く範
囲内にいることによって安心し、さらに乳幼児
を預けるという手助けや気遣いからも開放され、
かえって学習に集中できているのではないだろ

うか。さらに、ここでは取り上げることが出来なかった、教室の行事や学習者の直面する生活課題の解決を通じて関わりを持つ外部の専門家⁽³⁾とのネットワークについても検討していきたい。特に、学習者の生活圏を中心にして構成される外部ネットワークの形成過程や、教室参加者および外部ネットワークに関わる人々が、関わりを通じて得た気づきを、どのように自己形

11

